879

○さてゝ
こぢんゝおひゝくゝる西光
が但歩を以て怪敵紅の
人ずゝ先陣の軍勢ゝ
よ七ツ半時以来若くひ出光の弓矢を
はしる間ぞやよもかるまじゝとゝれゝ

浪士の勢

烟りの下より
切立

高大家の
家
浪士三百十人口の
傳うへ守護の木
前二丁引揚り
大家うの外者へ行き

つゞき
ときの声をどつとあげ
寺内へ切入り庫裏本堂の
きらひなく火を放ち烟りの下より
討入るに永見の家来も狼狽
大に混乱大さわぎ
すべて能れ共家人の
一丈ーと防ぎ
強ふ寺内に永
見の一家ぞお
何の危ふく
生捕を引あげたり
永見貞之丞

其夜に軍用金のごとくへいさん
町組の歩兵隊からうるへ大変
ある人是をみかどいさう動に発するる
て歩兵隊と探出捕らうて
ある浪士を目当に
箱先捕へて打留たに
残る浪士も
へいき
男谷なる
むかしを追懸く
つけ打ちに打ち
するなぞ
進んで隊くやしひなれど
帰の人引返すを図

つき

先へ進ませて
高麗勇
を進んで
進行
る
和又
水戸家
の人数ハ
[illegible]
[illegible]
取敢ず進ム

○切入ーつば歌舞がのろくろ
ろく同士付ろくあしとろん
和る筋道の浪士方へ
今者の表
付ホ十ち
の
傷利
と
図

大砲ー先ー史の光り
ゆて 勝鬨とゑる人
うげ用者と邑ニハ発
を打る而ハ是ホ右陣
邑張る寺の裏手へ史と
うけて切込邑ゆ
[illegible]
浪士
方ゆ暴ゝより
水戸家の陣井
合戦を乱ハ張る放砲一揆
の神戸ゆて潮りホ[illegible]て○
天
天
図ハーが
浪どーゞ
暴ろうゑんと
一同ホ表様
とう引揚ろ
次へ

つゞき

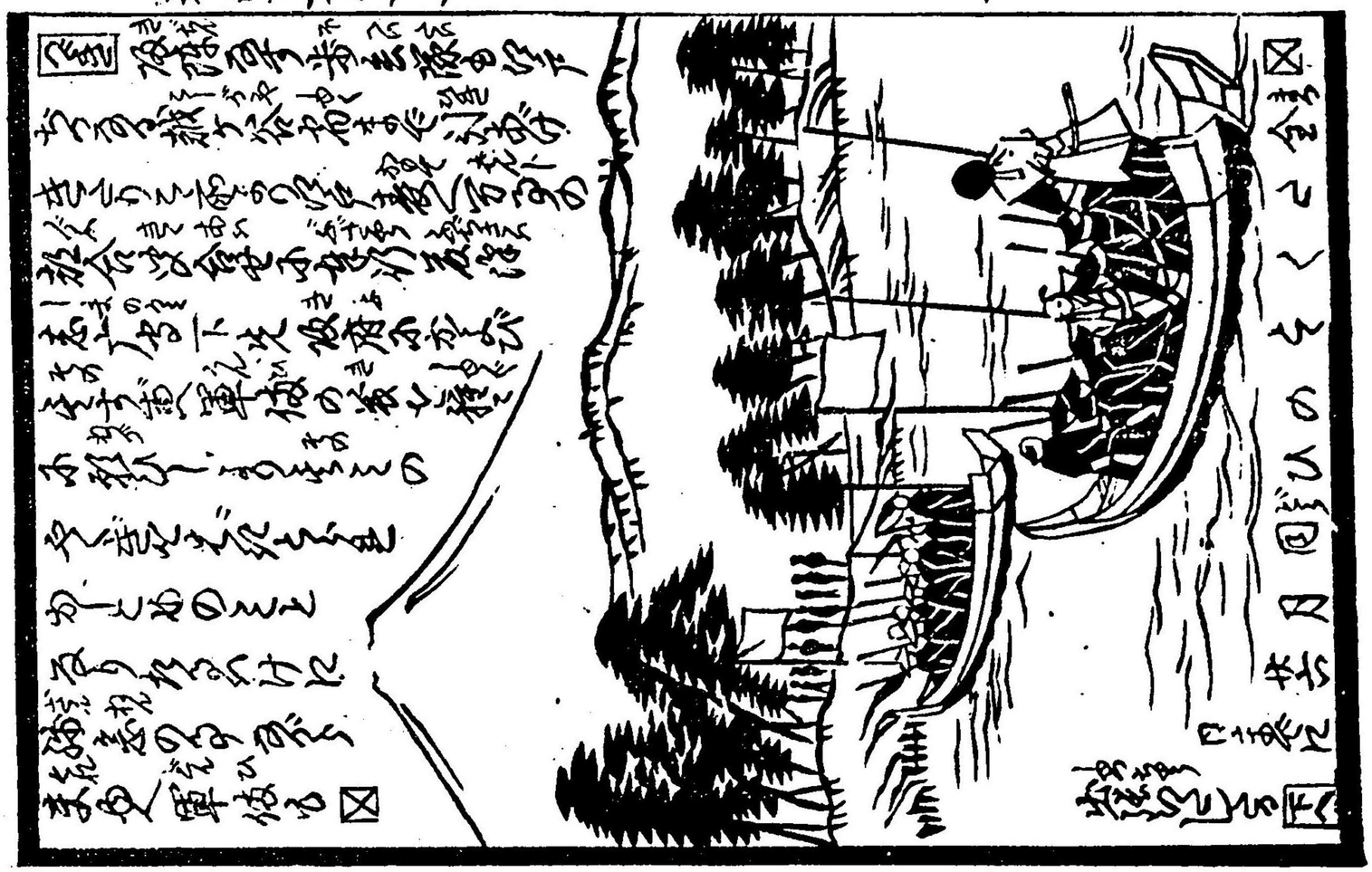
今度義村の大将ハ
脇田軍兵大炊助紀の友
人なり相模ゝ小戦ひ清
市中ゝ四五所ニて結火
しなれば焼場とまくなれ
ばくふすぶれ敵味方の見
物ハ
和田兵庫十八剣豪ありしゆ武
具ゆ武者ゆ家ちゝ欲ゆの小筒
二挺まで焼場ゆ捨てありにる又
義村ゆ水戸家ゆ
永久の家ゆ武者
上所死ゆ

一回
軍法ゆ
ゆ
聖人
下妻
陸
松
ひる

法さゆ
義重ゆ
倚ゆ
る
松
ゆ
義五ツ
同じ下妻の仕
去
玉

捕へそれ
るふつの名ゆへ
其外入れ替り浪士の
者二人まで有と
つらつら見
浪くと
浪士の浪士も色を雅く白状七
巳の名の和一郎田中源藤組
ふを出る鉄造と中也者今一人へ
剛勇にして
浪の内百
左弟
右樋一郎のあ
人左衛門羽織
うり又格蔵や
ゆへ長田小四郎
を死として辛十人
と使へり既に
名ゆへ安川鍋吉
弟七既ふ

つひに元日敵を中る〳〵
毛呂啓造
者人姓名さえもそんどゆさびたるよに
まるくかーにーるへ浪ゆへでゆより
らうとぶむ是ふ在ーとるとぶさめん
人ずのこ官とりして大石ふの姓名
まで逐一刺ドかるふんつ
ずに見ふて浪況せよときび
しゆせあに居ふとてつくだのらう
士が姓名ゆへのさへいてうこうふう
まふ結米在七ゆ様とこて
熱大石田丸猫之ふの
見ふ居ふ者百七十人
八十人
武外
東
直一
弟
字
左弟
松平
新郎
弟
彩郎

須田
田中源蔵の十人を
かしらと定めて人数を

水戸家の浪士
次へ